

【対象患者】当院で胃酸分泌抑制薬を6ヶ月以上服用した患者323名。平均年齢66.4歳。

【結果】糖尿病は54名、高血圧は131名、高脂血症は96名、生活習慣病を合併しない患者は131名であった。当院の胃酸分泌抑制薬内服患者における有病率と原告有病率（50歳以上）を比較すると、糖尿病は16.7%と14.2%で有意差なし。高血圧は40.6%と61.2%で有意差あり。高脂血症は29.7%と49.1%で有意差あり。肥満は22.6%と26.3%で有意差なし。

【考察】今回の調査では、胃酸分泌抑制薬内服と糖尿病有病率には相関関係が認められなかった。血中ガストリン濃度測定は行っておらず、ガストリンとの関係は不明。胃酸分泌抑制薬内服中の患者に高血圧、高脂血症有病率減少を認めたが、定期的な病院通院による生活指導の影響もあると考えられた。

7 精神症状が主症状であった副腎不全の1例

星山 真理・星山 彩子・星山 圭鉦*
柏崎中央病院 内科
同 外科*

症例は21歳、男性。主訴は全身倦怠感、嘔気、不安感。

【現病歴】中越沖地震後に数kgの体重減少があり、09年4月21日より悪心、嘔吐、便秘が続き、24日当科初診し、27日入院。

【現症】BMI 20 kg/m²、血圧121/87mmHg、脈拍60回/分。皮膚・粘膜の色素沈着なし。他身体理学所見に異常なし。

【入院後経過】低血圧、低血糖、低Na血症より副腎不全が疑われた。

【各種ホルモン検査】血漿ACTH、コルチゾールの日内変動では、ACTHは基準値内、コルチゾールは3μg/dl以下で、いずれも日内変動喪失。迅速ACTH試験ではコルチゾール基礎値の低下と、30分後の5以上の反応を認めた。なお、レニン、アルドステロン、DHEA-S、FreeT3、FreeT4、TSH、GH、ソマトメジンC、PRL、LHは正常であり、ACTH単独欠損症と考えられた。抗副腎皮質

抗体や他各種抗体は陰性であった。コートリル20mg投与後の経過は順調である。

8 クッシング症候群を合併したCRH産生褐色細胞腫の1例

鈴木 恵綾・間中 英夫・後藤 敏和
妻沼 到*・笹野 公伸**
山形県立中央病院 内科
同 脳神経外科*
東北大学病院病理診断分野**

症例は39歳、男性。発熱・脱力感を主訴に当院を紹介受診した。血糖値660mg/dl、血圧232/152mmHgと著明な高血糖・高血圧の所見あり。インスリン投与下血糖コントロール不良かつ、過剰な血圧変動を認め、褐色細胞腫疑いで精査を施行した。CT上50×36mmの左副腎腫瘍所見あり。内分泌検査では、アドレナリン・ノルアドレナリンおよび、ACTH、コルチゾールの著明高値を認め、褐色細胞腫、副腎悪性腫瘍、ACTH依存性クッシング症候群の可能性が考えられた。

しかし、MRI上明らかな下垂体腺腫所見を認めず、クッシング病は否定的。このため、副腎癌疑い・褐色細胞腫疑いとして副腎腫瘍摘出術を施行した。病理所見は褐色細胞腫・副腎皮質過形成であった。

術後内分泌検査では、アドレナリン・ノルアドレナリンとともに、ACTH・コルチゾール値も低下。褐色細胞腫細胞でCRH染色陽性であり、「CRH産生褐色細胞腫」と診断された。

II. 特別講演

甲状腺腫瘍の取り扱い

浜松医科大学内科学第二 教授

中村 浩淑